

社会政策と社会問題

——河合栄治郎『社会政策原理』の検討——

大竹 信行*

Social Policies and Social Issues

Nobuyuki Otake

1. はじめに

河合栄治郎（1891-1944）は東京帝国大学で金井延の後を継ぎ、社会政策講座を担当していた。「大河内理論」で名高い大河内一男も門下生である。河合の社会政策学は『社会政策原理』に結実し、その社会思想を知る手がかりとなる重要な著者の一つとみなされている。そこで提示された社会政策学は、具体的な「各論」は意図的に省かれた一般的・抽象的な「総論」のみの、一風変わった思想色の濃いものであった。

これまで日本社会政策思想史においても、あるいはまた河合栄治郎を正面に据えた河合研究の系譜においても、理論的解明が十分になされているとは言い難い。佐野稔が指摘しているように、戦後、河合の社会政策についてはほとんど顧みられることがなかったのである（佐野1993:15）。

そこで本稿においては、今後の理論的研究の準備として、『社会政策原理』における「社会政策」と「社会問題」という基本的な概念について総括・整理しておきたい。

2. 社会政策

2.1 社会政策

河合は緒論において、社会政策の用語例を次の三種に区分している。第一は「資本主義に対する一種の思想的立場」、第二は「社会改良主義の立場よりなされたる施設方策の体系」、第三は第二の意味での社会政策を対象とする学である「社会政策学」である。

河合によると「政策」とは、「一定の目的を達成するが為に、社会現象に何等かの影響を与えんとする方策、施設を意味する」という。したがって政策の種別は、「達成されるべき目的が何であるか、影響を与えられるべき対象としての社会現象が何であるかにより決定せられる」ので

* おおたけ のぶゆき 文教大学生生活科学研究所客員研究員

ある。

では、河合にとって社会政策の目的とは何か。それは、「社会に属するあらゆる成員が人格の成長を為しうる社会組織を構成することである」（河合 1931=1968:20）というものだ。経済政策と混同しがちであるが、経済政策の目的は生産力の向上・発展であり、社会政策の目的は「全成員の人格の成長を確保する社会組織を構成する」ことである（河合 1931=1968:20）。ここで河合は、「人格の成長」という倫理的・道徳的な視点を導入しているのである。

2.2 社会政策学

河合はヴァインデルバントとリッカートを援用して、科学を「自然科学」と「文化科学」とに区分する。ついで、社会政策に隣接する文化科学として経済学・法学・政治学・社会学を挙げている。ここでいう「社会学」とは、社会問題を対象とする科学を指しており、独自の用語法として使っている（河合 1931=1968:31）。

この四種の文化科学は、方法に応じてそれぞれに「法則学」「歴史学」「政策学」が成立する。「政策学」は、「一定の目を設定し目的に対する手段を案出し、その手段を原因とする結果を探求し、之等の結果を比較考察して、手段の取舍を決定することを目的とする」ものである（河合 1931=1968:32）。例えば、経済学には法則学として経済原論・理論経済学があり、歴史学として経済史、そして政策学として経済政策学が分類される。しかし、社会についての法則学と歴史学の未発達により、社会政策学は法則学と歴史学の一部を包含するところに特異性がある。

よく知られているように、マックス・ヴェーバーは『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』において、「価値自由」を提唱した。河合もまた、社会政策学と価値判断に関して言及している。価値判断論争に対する考え方としては、ヴェーバーのような価値判断反対論者である「主観派」、シュモラーのような理想に普遍性を認める「客観派」、そしてシャックのように二つの立場を止揚しようとするものの三種があるのだが、河合はいずれも批判する。河合は、「政策学は価値判断を前提とすることなしには成立しない」としているものの、客観派の考え方は哲学の任務であるとして排除する（河合 1931=1968:55）。

3. 社会問題

3.1 社会

河合は社会問題を論ずるにあたり、まず社会の定義から始めている。それはマッキーバーなど社会学の知見に依拠して部分社会と全体社会とに区分し、国家は部分社会であるとするものである。ここから、全体社会とは全成員の人格の成長のためにあるから国家は従となる、という思想が提示されている（河合 1931=1968:59-64）。

次に社会の本質に関して説いている。従来、個人の実在を認め社会の実在を否定する立場、社会のみの実在を認め個人を派生的二次的存在とする立場、社会を意識し社会を欲望する個人が主体する立場の三種があった。河合は、「自己のみを考えるに止まって公共の為を図るに非ざれば、その人自身が成長したとは云えない。故に自己のためということと他人の為ということとは二にして一である」とする。これは三つ目の立場に類似しているが、個人と社会は背馳した関係ではないという社会観である（河合 1931=1968:65-69）。

さて、社会の存続のためには社会制度が必要である。河合は「社会制度とは人間の善なる意志

の表現であり、あらゆる成員の人格の成長を希求することを理想とする」としている。ここから次にみる社会問題に対する見解が導き出される（河合1931=1968:69-74）。

3.2 社会問題

社会問題の範囲、つまり何をもって社会問題とするのか。河合は三つの慣用に分類する。一つが「社会公共に関係ある一切の問題」を社会問題とするもの。二つには「社会制度の欠陥より生ずる問題のみを抽出する」もので、婦人問題、労働者問題はここに入る。三つには労働者問題のみを指すものである（河合1931=1968:75-78）。

河合による社会問題の範囲の規定は二つある。一つが「社会制度の根本的欠陥より発生する一切の問題」というものである。ここから社会問題が発生する心理的過程が説かれる。河合によれば、まず労働者の困窮といった現象が必要であり、次にこの現象が社会制度により生じたという「必然の因果関係の認識」がなければならない。この認識から労働者の困窮という現象が正当か不当かの批判が起こる。不当であれば社会制度に欠陥があるという批判が起こる。そして「社会制度は改革せざるべからずという欲望」が生ずるのであり、一定の現象、制度との因果関係の認識、社会の理想に関する意識の三要素が社会問題発生には必要であるという。

もう一つの規定は、「現代に於ける社会問題の内容は、労働者問題」というものである。河合にとって全成員の人格の成長が社会の理想であるが、現実の社会組織は矛盾している。その矛盾により発生するのが「社会問題」であり、資本主義においては労働者階級と資本家階級の関係によって発生する（河合1931=1968:76-77）。

河合は、現代の社会問題はすなわち労働者問題であるとして、最も早く問題が生じた18世紀後半のイギリスを事例に、上述の発生原因たる三要素から労働者問題の発生を説明する。まず、産業革命後の鉱山労働の悲惨な生活状況がある。次に、この現象の批判として人道主義とくにメソジスト教会などによる改善がある。価値批判としてはフランス革命思想と功利主義が登場した。前者は「自由平等」、後者は「最大多数の最大幸福」を掲げることによって特権階級から社会制度を解放する使命を果たしたのである（河合1931=1968:88-108）。

こうして18世紀末から19世紀初頭において、環境を改善しなければならないという社会制度改良・改革という思想が生まれたのであった。これらを前提にして、現象と制度との因果関係について明らかにする必要がある、河合によればこれが「資本主義の解剖」あるという（河合1931=1968:108）。

4. おわりに

ここまで概観して、河合の社会政策・社会政策学の特徴として次の点が浮かび上がってくる。まず、根本に全成員の人格の成長という思想が存在していること。次に、社会問題発生を三つの要素によって説明していること。そして、社会問題が労働者問題に限定されていることである。

最後に今後の研究課題について展望を記しておく。まずはこの小論の続編として、河合の資本主義論および社会思想批判を概観し、思想・概念の骨子を明確にしたい。また、社会政策と価値判断に関するヴェーバー批判といった個別的なテーマについても掘り下げていく必要があるだろう。

[文献]

- Atuko, Hirai, 1986, *Individualism and Socialism; Kawai Eijiro's Life and Thought*, Harvard University Press.
- 遠藤欣之助, 2004, 『評伝 河合栄治郎』毎日ワンス.
- 池田 信, 1978, 『日本社会政策思想史』東洋経済新報社.
- , 2001, 『社会政策論の転換—本質-必然主義から戦略-関係主義へ』ミネルヴァ書房.
- 粕谷一希, 1983, 『河合栄治郎』日本経済新聞社.
- 河合栄治郎, 1931, 『社会政策原理』(=1968『河合栄治郎全集第三卷』社会思想社, 所収).
- 河合栄治郎研究会編, 2002, 『教養の思想』社会思想社.
- 松井慎一郎, 2001, 『戦闘的自由主義者 河合栄治郎』社会思想社.
- 西村豁通, 1989, 『現代社会政策の基本問題』ミネルヴァ書房.
- 西村豁通・荒又重雄編, 1989, 『新社会政策を学ぶ』有斐閣.
- 大河内一男, 1969, 『社会政策の基本問題』(『大河内一男著作集第五卷』青林書房新社, 所収).
- , 1980, 『社会政策(総論)』(増訂版)有斐閣.
- , 1981, 『社会政策(各論)』(三訂版)有斐閣.
- 大竹信行, 2000, 「教育者としての河合栄治郎」『白山社会学研究』8:63-72.
- , 2003, 「河合栄治郎の恋愛観」『白山社会学研究』11:23-34.
- 佐野 稔, 1993, 『昭和史のなかの社会政策』平原社.
- 塩田咲子, 1989, 「社会政策の源流」西村豁通・荒又重雄編『新社会政策を学ぶ』有斐閣.
- 滝村隆一, 2003, 『国家論大綱(第一卷上)』勁草書房.
- 玉井金五・大森真紀編, 2000, 『新版社会政策を学ぶ人のために』世界思想社.
- 土穴文人, 1982, 『社会政策立法史研究』啓文社.
- Weber, Max, 1904, *Die »Objektivität« Sozialwissenschaftlicher und Sozialpolitischer Erkenntnis*. (=1998 富永祐治・立野保男訳『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波書店.)
- , 1917/18, *Der Sinn der »Wertfreiheit« der soziologischen und ökonomischen Wissenschaften*. (=1971 松代和郎訳『社会学および経済学の「価値自由」の意味』創文社.)